Ⅳ-66　低レベル生活圏の評価に関する考察

福井工業高等専門学校　正員　武井幸久

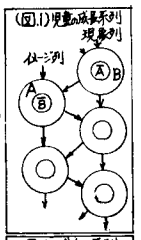
[1]、はじめに　　生活圏は階層性をもち、各レベルの圏域には開放化、閉鎖化という2つの傾向が考えられる。社会変動の大きい時期や大圏域に関しては前者の特徴が強く、安定期や小圏域ではある程度の閉鎖性が評価される。特に、近隣・地区など低レベル圏域では、良好な生活の場の確保が適度な空間的閉鎖性とその居住者集団との対応性が前提となる。この点に関し欧米では、低レベル生活圏の居住者管理を子供や高齢者への対応面から重視するK.リンチ[1]を初め、クルドサックなどの閉鎖的形態について子供の安全を検討する例[2]も認められる。我国でも、建築分野などで、近隣形態に関する人間関係[3]や道路による圏域分断の影響[4]等が検討されている。

本研究では、そうした低レベル生活圏の在り方について論じ、地方都市の中心地区、郊外地区におけるイメージ・実態調査、彼等と父兄、祖父母を対象とする意識調査をもとに、現状の評価と問題点について検討する。

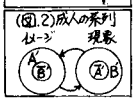
[2]、低レベル生活圏の意義

この圏域では居住者、殊に結びつきの強い子供や主婦、高齢者への適合が重要である。しかも、子供はその在り方を受動的に学び、将来の環境形成に向かう準備段階にある。(図.1)はその過程を概略化したもので、圏域Bを$\bar{B}$としてイメージAに取り込み、解釈、評価を経て行動やイメージを調整していく。一方、成人では行動がかなり固定化し、(図.2)の反転図形に近い形となると考えられる。子供は最終的にそうしたパターンへと導かれ、今後の低レベル圏域の在り方を決定づける意識をもつことになる。そこで、子供のイメージや実態、意識、さらには成人の意識を検討することによって、現状の評価や問題点を検討することは、物理的形態との関連を考えるとで重要性をもち、その結果を基に将来の生活の場の在り方を、実際の日常圏域として実体化していくことが必要である。そのため、以下では2種の調査を通し、低レベル圏域の現状について近隣形態をベースとして意識面から捉えてみたい。

(図.1)児童の成長系列



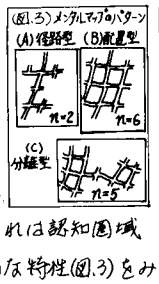
(図.2)成人の系列



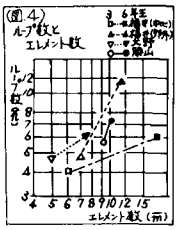
[3]、調査と結果の整理

地方都市でも宅地の郊外化が進んでおり、低レベル生活圏はその位置に関し異なる特性をもつと考えられる。よって対象地区は規模を異にする大野、勝山と福井の中心地区と、福井の郊外の計4つの小学校区とし、各小学校の協力で児童の調査は直接、父兄・祖父母の調査は児童を通じて配布・回収する形とした。

(図.3)メンタルマップのパターン

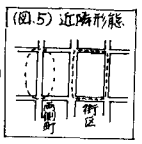


(図.4)ループ数とエレメント数



(3.1) 児童に関する調査　　この調査ではメンタルマップに主眼を置く、これは認知圏域の広がり等を調べるために地区の概略図を描いてもらうものだが、今回は面的な特性(図.3)をみるため、ループ数n((道に囲まれた区画数)+2)とエレメント数(建物・場所等の要素数)mを指標として測定した。(図.4)は各地区3,6年生の平均値を縦軸n、横軸mとして両対数グラフにプロットしたものである。この点に関し簡単に説明すると、一般に地区の認知は、(A)径路型から(B)の配置型へと変化すると言われ、児童の場合、その地区が行動の安全を保証すれば、多様な行動により(A)から(B)へとマップが容易に変化していくはずである。そこで彼等の行動性を結果としてのマップの特性から読み取ることになるわけである[5]。また同時に、その特性との関連を考えるために近隣形態(図.5)、安心して遊べる場所と実態、物的手段についても調査し、保護者に対しても類似調査を実施した。(表.1~4)はその結果を示したものである。

(図.5) 近隣形態



(表.1) 近隣形態の分布

地区	年齢	両側町性 %	街区 %	その他 %
福井(中心)	3年生	14	58	28
	6年生	49	46	5
	父兄	66	18	16
福井(郊外)	3年生	18	77	5
	6年生	27	68	5
大野	3年生	51	46	3
	6年生	64	27	9
	父兄	70	17	13
勝山	3年生	86	7	7
	6年生	85	4	11

(3.2)意識調査　　勝山を除く3地区の児童、両親、祖父母に対しては、29~40項目の環境要因と全体的な住みやすさを5段階評価する意識調査を行い、その内27項目を3段階評価に変換し、全体的住みやすさを外的基準とする数量化Ⅱ類による3群判別を行った。(表.5)は各地区・世代毎のレンジに関する12位

までの順位と、それらの項目の得点（はい＝1，まあまあ＝0，いいえ＝−1として平均）を示したものである。そして、この結果については、近隣形態との関連をもとに世代差、地区差を検討する。

(表.2) 遊び場についての調査結果

地区	場所属性	住宅内	公園	学校	空地・広場	道路	寺社境内	その他
福井（中心）	3年	36	29	14	9	5	3	4
		74	6	4	1	5	1	9
	6年	41	26	21	5	3	2	2
		64	12	4	1	1	1	17
福井（郊外）	3年	15	30	10	11	20	14	0
		38	9	7	10	15	8	13
	6年	22	27	17	9	8	12	5
		56	3	0	15	7	0	19
大野	3年	30	28	16	10	2	7	7
		55	12	8	1	10	8	6
	6年	38	22	17	11	4	8	14
		83	9	6	1	0	0	1
福井（中心）	父母	11	2	4	30	13	25	15
		3	46	6	30	2	7	6
大野	父母	7	7	2	40	13	18	13
		4	61	7	23	0	3	2

・児童 上段：おいて遊べる場所，下段：普段の遊び場
・父母 上段：子供の頃の遊び場，下段：子供を遊ばせたい所

(表.3) 移動手段（上：通勤用，下：買物用）

地区	年齢属性	徒歩	自転車	自動車	その他
福井（中心）	3年	53	32	15	0
		36	38	26	0
	6年	13	72	15	0
		13	67	20	0
福井（郊外）	3年	38	43	1	18
		5	40	26	29
	6年	26	60	7	7
		1	64	23	12
大野	3年	11	74	15	0
		6	44	50	0
	6年	1	84	5	0
		2	69	29	0

(表.4) 地区内移動手段

地区	年齢属性	徒歩	自転車	自動車	その他
福井（中心）	父	49	26	26	0
		45	25	25	5
	母	37	49	13	1
		39	38	19	4
	祖父母	56	18	23	3
		52	19	24	4
大野	父	33	29	37	1
		37	27	34	2
	母	31	49	19	1
		32	42	24	2
	祖父母	49	36	15	0
		45	32	20	3

（上段：現在，下段：将来）

(表.5) 数量化Ⅱ類における要因のレンジ順位と評価得点

	地区	大野			福井（中心地区）			福井（郊外地区）	
	アイテム＼属性	児童	両親	祖父母	児童	両親	祖父母	児童	両親
1	空気のきれいさ	4 (.70)		12 (.50)	3 (.28)	7 (.13)	12 (.11)	1 (.59)	1 (.77)
2	日当りのよさ	5 (.62)			10 (.39)	1 (.19)	11 (.30)	5 (.65)	
3	静かさ					3 (−.10)			
4	緑の豊かさ		8 (.25)						
5	近くの川のきれいさ			6 (−.22)	12 (−.30)				
6	プライバシーの保持		10 (.22)	7 (.50)	9 (.38)	2 (.08)	1 (.30)		
7	用心のよさ	10 (.43)	9 (.09)					12 (.59)	4 (.25)
8	家の前への車の入り易さ		12 (.11)	3 (.24)		5 (.11)	4 (.25)		5 (.41)
9	駐車施設			11 (.10)		10 (−.14)			
10	家の建て込み具合					8 (−.28)	3 (−.04)	3 (.38)	7 (.37)
11	隣り近所との付合	6 (.65)	3 (.40)	1 (.57)			2 (.33)	4 (.74)	
12	近所の協力性		2 (.20)						
13	雪についての対策	2 (.41)			11 (.27)			9 (.33)	
14	まわりの道路の安全				5 (.10)			6 (.40)	12 (−.01)
15	まわりの道路の交通の少	8 (.30)							10 (.18)
16	子供の遊び場の安全	12 (.44)						7 (.56)	11 (−.16)
17	子供の遊び場の近さ	9 (.50)				6 (.08)	10 (.22)		
18	公園の利用しやすさ	3 (.27)		8 (.10)	2 (.27)				
19	通学の安全		5 (.19)	4 (.45)	8 (.37)		6 (.35)		
20	小学校の近さ		4 (.55)			12 (.49)	7 (.56)		
21	公共施設への近さ		1 (.13)		7 (.05)		8 (.25)	8 (.25)	
22	日常買物の便利さ	1 (.56)	7 (.51)	10 (.52)		9 (.66)	9 (.59)	10 (.28)	2 (−.23)
23	大型店・商店街への近さ	11 (.26)	6 (.35)	9 (.27)	6 (.28)			2 (.11)	3 (−.21)
24	バスの利用のしやすさ		11 (.14)						9 (−.34)
25	バス停への近さ	7 (.26)		2 (.16)	4 (.27)	4 (.33)		11 (.34)	6 (−.01)
26	国鉄駅への近さ			5 (−.10)	1 (.23)	11 (.60)			8 (−.72)
27	中心街への交通の便						5 (.65)		

[4] 考察

(4.1) マップと近隣

まず(図.5)から勝山の3年は元が最大で、配置型の傾向をみせ、而も大きく、6年への変化もその特性を強めている。他の中心地区の3年は元，而とも小さく、6年への変化も而の増加や分離型が目立ち、経路型の特性が強い。郊外でも3年は類似の特性を示し、6年で元が増加するが、マップの広がりも大きく分離型の特性が強い。この点を近隣形態(表.1)と関連づけると、勝山では両側町が3年以下で明確に認知され、他の中心地区ではその認知度が低く、そのことがマップにおける道の意味を異なるものとさせる。一方、新興の郊外は、最初から道を経路とみなす街区形態をとり、そのことがマップの特性として現れている。

さらに、児童の安心な遊び場と実態、父母の過去のそれや子供を遊ばせたい処との隔たり(表.2)もこの点に影響し、住宅内への囲い込みが、特に中心地区で進んでいる。この原因は恐らく、経路化の要因でもある移動手段にある。親と歩く福井中心地区の3年を除くと徒歩は好まれず、自転車、自動車へと推移している(表.3)。保護者もほぼ2割以上が、地区内に関してさえ将来の手段を車としている(表.4)。だが、この傾向により住宅＝車＝施設という道の経路化が一層進めば、マップは道表に経路化し、近隣を核とする閉鎖性やその意味が失われる。

(4.2) 意識調査結果(表.5)　環境の質や利便性要因(1,2,22,23,25など)はほぼ各地区、世代に共通してレンジの順位が高い。だが、上述の問題はここでも8,9と13,14,15,16に関する世代差として現れ、特に車意識と道、遊び場の状況は経路化と閉鎖性の対立を示している。しかも、形態的制約をもたない郊外では14,15,16が両親でも比較的高い順位にある。次いで、11.隣り近所の付合では、両側町が認知される大野の全世代で高順位にくるが、福井中心地区では祖父母、郊外では児童だけが高順位を示す。こうして、両側町形態は、安全に関する中心地区と郊外の保護者の意識差、近隣付合の媒介効果にもつながり、その実体化が世代差を調整する意味をも果たすことが考えられる。

[5]. 提起　以上の考察をもとに、最後に、伝統的近隣形態、両側町を歩行圏として実体化し、低レベル生活圏の基盤とすることを提起したい。地域的限定はあるが、勝山の状態から古い街並を経路化する大野、それがさらに進む福井中心地区、そこからの移転による郊外地区、この系列は両側町の意味を稀薄化する方向に推移し、代替形態を欠くために状況は良い方向に向ってはいない。環境の改善や、児童を良好な環境の造成へと導くものは、施設や移転ではなく、生活の場の形態や規範性にあることは十分強調されるべき点だと考える。

[6]. 最後に　検討に際し助言を戴いた京都大学 飯田教授、成器西・有終西・順化・旭麻生津の各小学校と本校卒業生の調査協力に心より感謝したい。また、文部省科研費奨励研究(A) 60750544の補助をうけたことを付記しておく。

参考文献、1) K.リンチ "居住環境の計画"、2) J.C.Baker他 "Children and Traffic" (Ekistics No.312)、3) 鈴木成文他 "共有領域の構成"、4) 高橋勇悦 "都市空間における境界科学と物的な境界構成"、5) 浅井建爾 "道路のマップ" 他